

「若手の会」の活動報告

日本家政学会若手の会は1996年に発足した。22年目を迎える今年は、2017年度第69回大会企画の「家政学の背景、魅力」の流れを踏まえ、「家政学」の原点と現代的な新しい取り組みをクロスオーバーさせる「What's 家政学? 原点、そして新たな視点から家政学を見る」をテーマにシンポジウムを開催した。シンポジウムは2018年5月27日午前9時から百年館低層棟2階207会場で行った。参加者は47名で、多くのセッションが同時開催されている中、多世代、多分野からの参加があった。

はじめに、羽衣国際大学前学長の岸本幸臣先生から『生活の科学化』から『科学の生活化』へ』をテーマにご講演いただいた。

家政学は、家庭生活の役割や社会発展と進歩の基本原則を説明する学問である。しかし、競争型市場経済の発展やクローン猿の作成成功事例など、近年の社会発展に対して懐疑的な風潮にあり、内閣府の世論調査でも特に若い世代において科学技術の発展に対して功罪両面を指摘されている。岸本先生はウルグアイのムヒカ元大統領の演説と家政学の理念との共通点に触れ、科学の発展に今後必要なことは、その発展を制御していくこと、コントロールしていくことであり、制御していく上での基準や規範の重要性を指摘した。家政学の新たな視点・使命として、生活を持続する視点から「科学の発展」を制御することつまり「科学の『生活化』」に対して家政学は諸科学と異なり学問的な使命、責務を担っていると述べられた。最後に、家政学を担う若手研究者に対して期待を述べ講演を締めくくった。

次に、武庫川女子大学の吉井美奈子先生から、家政学のおかれている課題について、発信力・アピール力の不足を指摘するご講演をいただいた。解決策としてグッズやSNSを通じてのイメージ戦略を含む若者への積極的な発信とともに若者からアイデア等を積極的に受信することで、新しい生活課題を取り込んでいくことを提言された。これから家政学を学ぶ若者や、研究者である家政学者のあり方等を含め、根源的な課題を投げかける講演となった。

その後のディスカッションでは、家政学の理念や本質や周辺の研究領域との違い、所属分野における科学の制御する点等について講演者と若手研究者との活発な議論がなされた。講演テーマ「科学の『生活化』」に関連し、諸科学において発展を制御するのは科学者の良心だが、家政学はその使命として科学の制御を行うことができるという家政学の独自性を指摘された。

学部名称に家政学部が減少している理由、改めて家政学を広く発信することの必要性や家政学をリデザインする可能性についても議論された。

今回のシンポジウムではこれまでにない2つの取り組みを行った。一つは、クリアファイルの配布である。クリアファイルは、関西の家政学原論研究会所属の研究者が中心となり書籍出版の過程で作成された家政学のロゴをあしらったもので、家政学を発信し、参加者が一層家政学を身近に感じてもらうことができる取り組みとなったと考える。

もう一つは、意見交換アプリである。パネリストと来場者のやりとりはこれまで挙手形式でおこなってきたが、意見交換アプリを利用することで、より多くの意見や質問をリアルに拾い上げるよう試みた。家政学とITとの融合を志向する取り組みとなった。なお、配布したクリアファイルについて、意見交換アプリにより評価を行ったところ、5点満点中4.2点の評価を得た。

なお、アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP (http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/) 上に公開している。

(若手の会幹事一同、文責・中迫由実)